フィールド（現場）からの風 ㉕1

宮田守男

誘客目的イベントとは異なる視点を大切にする取り組みが必要だ

8月に開催された第9回白馬カップ大学女子ソフトボール大会は、3日間降雨との戦いだった。夢を追いかける大学生の為に、試合を実施したいと関係者が知恵を巡らせ、大町市関係の皆さんのご支援もあり2日目から会場を大町市内で確保、熱戦が繰り広げられた。大会長を務めた吉沢篤さん、多くの人から慕われる人材でもある。試合用具の借入・返却でも、自らが自家用軽トラックで奮闘する姿は、監督や選手に驚きや感謝の視線が注がれた。松本大学をはじめ各チームの選手は、率先して会場準備や片付けに取り組み、役員・選手が一丸となって開催する大会は、多くの人の心を熱くするのだろう。

開会式の大会長の挨拶、初出場の美作大学の「土屋文乃（あやの）監督」の出場に至るエピソードを紹介。「土屋監督が、大阪国際大学の選手時代に白馬カップに参加、忘れられない感動を美作大学の選手にも体験させたい」との内容に大会関係者も心を打たれる。宿泊施設への誘客も大切だが、白馬に訪れた皆さんに何を伝えるのか。その着眼点が大切だ。大会で単に成績を競うだけでなく、選手に多くを学ばせる場になってほしいと願った事が実現。参加選手が、監督として再び訪れたのだ。

美作大学ソフトボールチームは、平成24年4月に発足、当初5名の部員、今大会も12名での参加。「全力疾走・心でプレー」をモットーに、感謝の気持ちでプレーを発揮・実践した戦いだった。強豪大学チームとも互角の戦い。特に交代選手がいないため、与えられた課題を自らが率先解決する意識の高さを随所で見せた。美作大学は、学生と先生の距離が近いアットホームな大学を目指す。「食と子供と福祉」の専門家を養成する岡山県の私立大学だ。熱血監督の一面や相談相手としてのお姉さん役。現役レベルの技術を持つ監督は、良き先輩役も受け持つのだろう。だが、チームの中の礼儀はしっかり保たれている事が伝わってくる。

ソフトボール競技は、1点差を競う競技と言って過言ではない。一瞬の判断ミスや躊躇（ちゅうちょ）が勝敗を左右する。だからこそ、監督は普段から選手にきつく指導に当たるのだ。白馬カップ大学女子ソフトボール大会に参加した選手の中から、良き指導者や世界を舞台に活躍する選手の姿を楽しみにしたいと強く願った、夏でもあった。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）

前列中央の土屋監督と取り巻く選手達、笑顔と素直な行動が強く心に残る